「地域医療拠点」確立を

公立浜坂病院あり方検討委 町長に報告書提出

新温泉町の「公立浜坂病院のあり方検討委員会」が13日、同病院の現状や課題、将来のあり方の方向性をまとめた報告書を、西村銀三町長に提出した。石田岳史委員長は「医療現場や行政の経験者、現場の声を反映した、魂のこもった報告書ができた。この方向性を現場で議論してもらい、良い方向に進めてほしい」と託した。（松本妙子）

浜坂病院の現状や将来の方向性をまとめた報告書を提出する石田委員長（中央）と佐藤副委員長（右）＝13日、新温泉町役場

病院行政や医療従事者ら有識者と住民による同検討委は、昨年10月から4度の会合を経て報告書をまとめた。浜坂病院（同町二日市）の医師や看護師不足の現状、厳しい財政状況、多くの町民が町外の医療機関を受診している利用実態を整理。一方で、地域包括ケア病床の導入や高次医療機関との連携によって本年度前半の病床利用率、医業収支が上向いている点を示し、「大幅な改善傾向がみられる」とさらなる注力やPR強化を求めた。

また「『ミニ』総合病院」ではなく、住民に寄り添い相談・対応できる機能に特化することが重要」と強調。今後の役割や進むべき方向として、総合診療（初期から日常的疾患の対応）▽住民健診などによる病気予防▽高齢化に対応した在宅医療、介護への機能特化・人材集中―を挙げた。

この日は、石田委員長（さいたま市民医療センター副院長）と佐藤一郎副委員長（県済生会病院常務理事）が町長室を訪れ、西村町長に報告書を手渡した。石田委員長は病院事業のあり方の3本柱として、高度医療施設との連携強化▽地域医療の拠点としての確立（救急対応、他医療機関への橋渡し、在宅医療や健診・医療相談、医療と介護の連携、出前講座など）▽住民に寄り添う医療従事者の育成―などを示した。

看護師確保に尽力することを前提に、仮に看護師不足に陥った場合は、住民の安心と安全の確保に必要な病院機能の維持を優先。「介護老人保健施設『ささゆり』を80床から40床に縮小し、看護師などを病院に集約」する事業案も提言した。

浜坂病院での勤務経験もある石田委員長は「20年前から浜坂病院を見てきた。限られた資源の中、選択と集中が求められている。良い転換点になったと思う」と述べた。西村町長は「専門的に現状をチェックして、方向性を打ち出してもらった。これからが勝負。住民、職員、議会の意見も十分聞いて、町の病院を守っていく」と話した。

日本海新聞
2019年2月14日掲載